

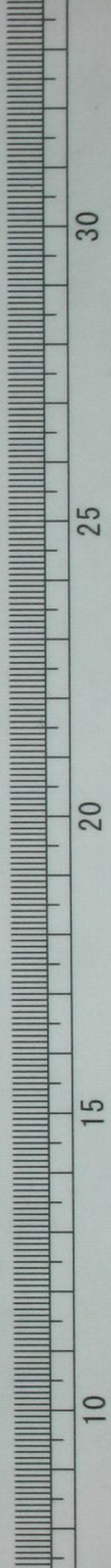
近世紀聞

漆崎延房輯

四編
自文久癸亥年
十月至同十二月

卷之二

413
530
11



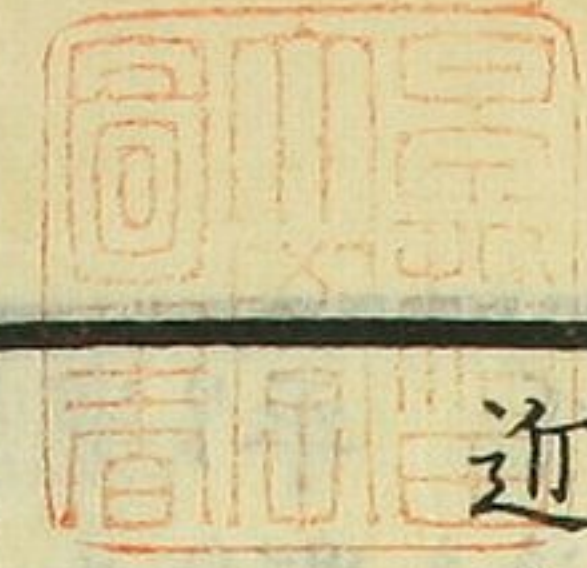
門 1 13
530
卷 11

近世紀聞四編卷之二

東都

添崎延房輯

大正二年二月
添崎延房氏寄贈



○生野銀山の義黨等屯集する事

再説 諸間の旅店に各席を列ねし折しも突然として
平野次郎が大変ありと言出るにぞ澤卿始発らち
駭の進く开のまゝ奈何ある仔細ぞと約しく問ハ
れく次郎の歎息しつ辞を密め小生昨夜姫路の
到る豫て相識る者み就く大和の動静を問試しに
去る八月下旬より天の川辻の楯籠り種々の奇計を
轉らしく屢寄手を惱せしが既に先月十四日道なき

近世紀聞 四編卷之二

山へ敵の廻りて後ろ、城襲ひまゐるにあり、天の川なる
 陣營敗まゝ十津川郷へ甯保し、夫より兵威漸次に
 衰へ、遂に諸勇士討死して中山殿も何國へ
 落させぬ、ひしと赴き、ありと大息、泣いて譚述、各
 色を失ひ、須臾辞もあつり、案下美五三平の平
 野に對ひて言へるや、思ひがけなれ、大和の凶變勢
 ひ斯の如くんを是迄来つる我が輩も進退あつに
 究まざる、尚此上の策ありやと問ひ、まゝさす、乃
 平野次郎も黙し、回答もあつらざる、姑くあつ
 て首とさげ、憑き切つたる天忠組が、ありふにも

似て戦ひ負て中山卿の生死さへ貞々あつと在
 り、から、何を便に事を挙げべき、結上の五三人
 宛別きて所々、小身と潜め、時節を俟つ、の外、何と
 言ひ、嗟歎、及ぶ、あぞ一座冷けて見へたる折しも
 傍に扣へ、南八郎戸原、卯橘の二人、憤然として
 找と出、平野姓、小日頃、似気、あく女、一紀、変を
 宣ふもの、うゑ、総々軍を、做せる、の、勝も負るも時
 運、小、何、色、天忠組の、敗、存、せ、し、珠、ら、一、の、ぬ、変
 に、一、今、更、驚愕、を、べき、にあ、つ、尤、も、大和の浪士
 等、と、謀、卜、合、せん、方、略、の、機、會、い、失、ふ、たり、と、雖、も、適

近世巴開
 四編巻之二

澤卿の陪従して是迄出張做らざり大和の噂に所
畏して做さ事もなく散乱せしと悪評あるんど受ん
に人面を向けがごとく今但州の救十名の有
志は阿曾と兼さぬ其が彼地に到り人救を聚め直
ちに大和の押寄せく天忠組のためにも吊ひ軍
為んぬの尚其組の残黨の潜居をわきま加りるを
して大義を挙る小至らんう尙夫迄小至らざりて
緯の破れぬ及びぬは又是時運の致を所開処命
を棄んぬの世に大丈夫たらん者が一且思ひ立と
る更と半途に瘡を謂や何んかんと席を敲て論を

まが彼の八郎小同意しく此拳に加り来りたる
久留新三郎あと言へる十個から軍乃長藩士等も
南戸原が辞を是よりと死をとり一歩も退くと
異口同音小言へるあを平野次郎の打按して兄弟が
英断寔小可し我が退散をなさんと云ひしと今更
かともへ臆談ありき余何んか但馬に進發し成否
の時運小任を互ららん尊慮奈何小やと上座
に對ひて窺へばこの時主水正氏殿にも諸士の辞
の勇まき小大い小奮激せらるけんその更最も
然るべしとく衆議一決ぬ及びし其夜の諒間に

一泊せられて夫より陸路を急ぐ程小十一日の正午
 の頃但州生野銀山小隣なる森塩村の延應寺と言へ
 るに一同到着せり爰にゆりゆく沢卿小他聞を
 憚る所や有りけん仮小御名を城小路五郎丸と名
 告り給ひ平野小佐々木将監と号し之則ち此挙乃
 謀主之を恚て延應寺へ着や否や平野小水戸の脱藩
 士川俣佐一郎等三名と呼近づく恚々仔細を稟
 し舎免の銀山へとく遣はせしを彼名領兼し之
 稍銀山の縣廳に到り是ハ城小路殿ありし使節を
 命とりらるる所の名を云云と言ふ者あるが縣令川上猪

太郎ぬし小御意得今記旨稟し入るが属役武井正
 三郎と喚ぶ者の立出即今知縣猪太郎小ハ備中
 の國倉敷へ檢見小到りて廳小何し御用の筋も
 ゆづ嗚咽小仰聞けられよと言ふに三名領ぎく然
 らむ貴所に演説せん這回城小路殿小ハ深き御趣
 意の在らせり是当地小罷越されり京師へ使節を
 立らるるまは朝廷ありし御下知何る迄姑く滞留
 致さるるの条此旨御意得置くべし之使命あるより
 申舒せバ正三郎ハ面を正し御使者の趣き兼知せ
 る然れども当所銀山の義ハ御関内の地あるが故に

豫て台命何らざる向ハ当地ハ逗留さする叟を許さ
 ざるは旋るきハ何ハ御受致しざらん御平都合に
 ハ在るべけれども他方へお遷りときあるべき旨
 返答み及びしを又繰返して左右と種々内談と遂
 一のバ正三郎めと打按ト御懇話の趣きの寔小
 餘義なくゆへども表立ては叟みてい先づ其筋へ
 申達し伺ひを経し上るるに討らひ叵き更るが
 ら御内談ととき何れ成无碍に稟し破らさぬが
 小生一分の扱ひまゝ一兩日の御休息と相心得て
 居るべけし其ら御相談ありて御座を他方へ移

さるると言ふを打听く佐一郎等の忝き旨回答し
 て其俣延應寺へ立返り縣廳にての応對振と箇様
 箇様と報告ゆぞ平野次郎ハ顔きく彼の三名の勞
 と謝し更ハ同村の商家ある太田次郎左門方を姑
 く旅宿と定めつ一同件の寺を去りて太田の許に
 落着しガ平野ハ胸ハ一策あれば先縣廳に使者を遣
 かり疎暴の行迹あり躰を豫め示し置きて儲まのこ
 美玉戸原等と竊ふ談合せしうはく其夜四更と覺
 した頃猛可ハ諸士に支度做さし先至急ハ旅宿を
 立出つ彼の銀山の陣屋ハ至り表門より乱入し

近世細聞

四編卷之二

四

土足の俣小玄関の戸を打破りて廣間へ通り属役
武井正三郎を押捕困らるる諸言ふやう曩に奸小路殿
より使節を遣はされし處台命あはれは逗留愜
ひ厄き杯不敬至極の返答あり抑当所へ發向ありし
幕吏の奸邪を 天朝へ訴へ再び攘夷 御親征を
譏るべき乃旨趣あるは当陣屋を明渡し 其金米兵谷
の属ひも備用の為め借逸与へし尙まる連背め及べ
る時ハ汝も攘夷を妨ぐる奸吏の類ひある故に天
誅忽ち免るる事なく二個の壮士が左右より拔身
の鎗を差付まは一個の白刃を振上げつ後ろに立ち

扣へ 形状否と言ふ一討と做さるる威勢なりし一ツハ
正三郎ハ駭くのも思慮を回らす虚間もあらずね違
氣に答へて言ふやう 仰餘美あらず陣屋及び金米の
属ひ奈何も御用立つべしれど記録其他必用の各ハ
取行付も致したく辨つばまた婦女子等が周章する
とと取鎮め立退るるをくは姑く御猶豫下さるべしと
言ふに這方も矣頭て然ら至急め取行付け疾く退
散せよとの答へ武井ハ劇しく自餘の同僚に旨趣
を語りて猛可に書類を取纏め婦如を引連は是非
も各退去する程ハ平野等陣屋を搔掃らせやぐ

近世紀略 四編卷之二

強談す 等縣廳に 掉々浪士 劔戟七打



沢卿と迎へまのせ更ふ当所の商家小命トて菊桐の紋
 染出したる幕の属ひを出来つせとこれと玄関の張杯の
 頓て救通の檄文と此近郷小飛せと云く先年開港あ
 りて以来御國躰と汚せるのそ小民困苦及べると深く
 御憂慮遊ばされ屢幕府へ掃攘の 勅書と下しぬ
 と雖も終小 朝旨と遵奉せば刺へ毒薬をど献した
 らし 妻何れども 皇祖天神の保護小依り 玉躰恙
 在さず然るに去々月十八日奸賊會津中將等が詐謀を
 以て禁門と鎖し正義の公卿の参 朝と止め頓小
 攘夷 御親征の 御幸と解放をせる 糸俱に天と

載くに忍びざるの仇敵あり今や 皇帝逆賊等が
 中々困る在まは 吏実小千秋一時の一大危厄といふべき
 のと斯る時節小方りや倭魂ひらぐ者誰か涙泣せ
 ざるべく 誰が身命と抛ちて國家小憤忠做ざるべき然る
 に但馬の人民の忠あり義あるの國風みや當初南北
 兩朝の時も更に足利の賊意小與せば 皇威と揚ん
 と主張せしを思召出さるるは最憑りく 思召されば
 今此大拳小馳加り俱小計りて奸を鋤き 敵慮と安ん
 奉るべし但馬國舊家の面々及び有志の人々へ沢主水正とを
 記さるる斯る後銀山の管轄ある郷村より里長の類

ひと喚出し彼撤文の旨趣を示して今此大義あかりと
忠義と 天朝へ竭さん者其旨具小奏問を遂げ何れ
も年租半救の永世免除何んぞわが小前末々ふ至る迄
懇ろに説示し必だ疑念を抱く更さく各得物を携へ
て当所へ参着せよきめ旨諭達し登びしうし久其頃
生野の姫路屋と言ふ郷宿小逗留して専ら劍道の
指南を做せる伊藤竜太郎と喚る者弟子十四五名
引俱して第一番小馳加りし其地役人浪士
の属ひも追ふ小隨身せざる者も何り又近郷の莊客等
も此時大いふ奮發して鉄炮及び竹槍あんどあひひくに

勢へつ我後まどと馳集る者救百の人救に及び
ふ此機會を失りて事と拳んと思へる大和の
拳動も鎮静して四家の兵士も既ふちや凱陣せし
その趣きされを今更吊軍と号して大和へ進發せし
ゆりて先や京師小推泰して會津等々罪状を唱へ
七卿及び長州の寛を解せぬやう強訴さすあり他
何れも仍て人救乃手配りを定め明後十四日の早天
此地を發し丹波路より入京せし趣き一同決議せし
う夫等の準備及ぶ程は是より先小會津彦あ但馬に
許多の浪士来りて生野の陣屋を乱妨さし彼処小屯

集りたるの旨即刺注進有りく頭て近國の諸侯に
 布して追討乃義を命むるほど姫路酒井家出石仙石家豊岡京極家等の
 藩々何をも人救を繰出して襲ひ来さる形勢の稍銀山に
 聞へる平野等再び議さるや恁の如く各藩より兵隊向ふ
 と何るかしの咄門沢卿の御供しそりや入洛み及びんと
 するも京師の諸家乃番兵警衛ありて在るまきふ又後ろ
 より姫路等の兵隊襲ひ蒐らんあり前後の敵を引受け
 遂に進退自由を得ぬべく開処に至るも幾何をもり
 會津の奸曲非義を救へく強訴に及びたりことども
 正義反つて暴徒と言つて素志を遂るゆ至り也

けんこの奈何して善くんと種々談判み及びど雖も
 衆議紛々として決定せず當下南八郎あり奮然として
 声掉立我が輩茲小事を挙る幕府諸藩命令を布
 て追討あるさんと計る是当然の事はして今更駭く
 べらふらざる固より今回の大義に於る事成る時ハ七卿
 始め我藩主たる宰相父子の冤を解て入洛さるる再
 び攘夷御親征の朝議にも復さるべく尙半途の
 て破迄に至るべ死んと決議をせしにありばや然る小
 大和の義挙敗れく齟齬さるる更のそ尋るに討手の
 兵隊向ふと何れもや死すべきの時至る然りと袖手

して阿容々々を擒ふるらんや一旦防禦の策と構へ命の限
 里血戦しそ死後に美名を遺さんらと武門の本意と
 言ふべし是れ亦も当所の陣營の敵を防ぐの要地に
 何れ我れ聴く是るる銀山より北へ去る一里計り山口
 村と聞へしは出石豊岡への道路はくく村の東へ一ツ
 の山あり又其山の中央へ一字乃妙見堂ありて最と要
 害の地あるも小生同藩の有志と俱ふ農兵二三百人
 と率ひ妙見堂の楯籠りて便宜の場所にて砲臺を構へ
 出石豊岡の両兵隊と彼所に於て喰留むべしは自餘の
 勇士等陣營と衛り倘も敵兵襲来して防戦危うからん

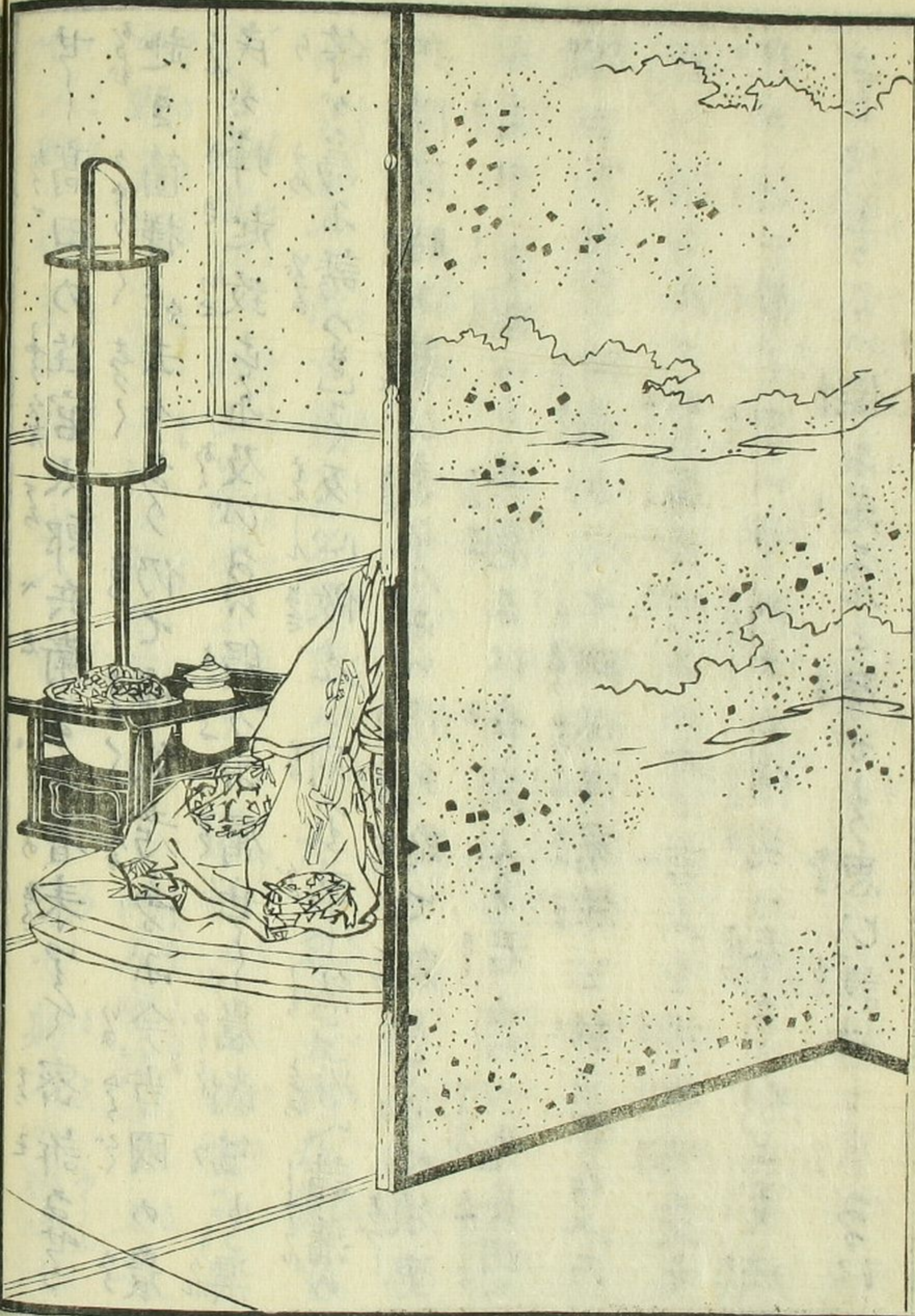
時ハ沢卿の御供へ妙見堂の甍保とたまへ其時
 俱に死さんぬ此期に至り長々しに議論ふ及ぶ
 更らぬと言ふは流うち聴く戸原卯楯が完ふと笑はく
 找し出南の高論至極せり小生も又妙見堂の隊に
 加りて抗戦あり一臂の力を協さんと最勇はしき
 兩人が辞め一同激まされ各其意に隨ひつ南を
 其隊の首將とあり戸原及び長藩の壯士十一名を副將
 とし農兵救百人を分ちて陣屋に備へある所の大砲を
 曳を杯しつ此月の十三日山口村へと進發し妙見堂に
 楯籠りて防禦の準備を做しするる亦ハ銀山の属役

たる武井正三郎等甲乙の威勢止むを得ざるより陣屋
を渡して退去る。姑く潜居ししが既小諸藩の兵
隊の進む向ふと所より大いぬ是ぬ力を得て郡中の
獵師乃屬ひ其他倔強の莊客の浪士小與せざるりのを
驅聚めつ隊分して銀山及び妙見堂の暴徒を退治
をせしむの旨命して準備及び赴き同國高田村の
莊官めて豫て義黨小隨身たる名を太郎兵衛と
言へる者其夜銀山の陣屋小来りて箇様々と報告にぞ
平野美玉の輩の大い胸を苦しめしが兩人密談せし上小
沢卿の御前小找し出つ。儲言ふや豫て躬方の腹心と

せし高田の莊官太郎兵衛ある者来りて密訴せし
赴き箇様々と云々あり仍て俺們考ふ今當國の農
民が蜂起致す及びるが躬方小屬せし農民等も渠
等が為小誘ひ見せし反心做ん測へる也。然る所へ諸藩の
兵隊同時小襲ひ来らんぬ内外総て敵とありて須臾
も支ゆる叟愜つて其危きに在らんより君小一先長州へ
落させぬ。時来りて七卿侶俱冤罪を解くせぬ。乃
歡びららん。賢慮奈何ぬやと言ふを沢卿听あむ
我が躬を厚く思ひし。兩士の信義ハ忝るれど叟成
ざるに至りて俱小死さんと豫てより思ひ設けし事あるに

近世紀略
四編卷之三

男 辭去 兩雄 退去 澤
詞 退 澤 雄 兩 去 男



近世紀略
四編卷之三

殊更南八郎等の妙見堂小楯籠り必死の血戦做ん
 とはる我の脱する謂や何らん這処はて防ぎ回
 らんバナが嚮ふ言ひつる如く妙見堂小赴き死を彼
 輩と俱れせんと固辞して更小落ぬ御気色もてと
 見へざれば兩士の竊々に感泣の涙を掩ひ兼けるお
 憊々の果とと思ひりん平野の辞を激して這の仰
 とも覚へ申さば君の國吏小関しぬる重き職務
 で在しあがらぬ細謹を顧み後の大功の立るぬ
 ざる死をのぞ急ぐ血気の勇め智者の為ざる所
 あり素より吏を奉る吏這回小限るまは在らぬ自ら

御身を愛しぬひ忍び難き誠忍びせらるる遂小天
 運循環しく敵慮を安と奉らるる春に遇いぢや在
 るべき既小中山侍從殿も彼南山の戦ひ敗れ諸有
 志戦没る中を脱し退去為ぬしも只徒らに
 一命を存んば結為ぬし後の大義を計らんこ
 思し召すの吏も先彼御圍を破抜て斃命と
 恙あり必だ長門小赴き再議小及びぬれ君
 ぬも彼地小到らせぬし共小恨力ありぬれ報國
 の素志立回らん小生とても國家の為小尽力事
 既小も十有餘年小及ぶ迄苦心止む時ありしと只此

一挙の係りて虚しく命を棄ん度争う本意と憶ふべき
 余共時運の致を所免く難き場合小臨まの开処
 に命を殞まべく倘幸ひ小脱せん小の再び事を挙
 ぐべしと屑まらぬ我輩さへ斯め如くに思へる誠
 矧や貴族のあん身はく土木と共小朽果んと云餘り
 と言ふ勿躰ありと辞と竭して論を述べ美玉は是
 の語を次て万般諫め激を以て沢卿遂小理小服せ
 らまゝと兩士の辞小任せぬべ恥て有志のその中
 にて心利する者との三四名選出してられと沢
 卿小陪從做さし免既小中夜過る頃竊り小陣屋の

裏手より間道傳ひに落しまつせ稍行程二三里と
 走りぬふと思ふ迄の同志の者もこれと知らせば左右
 するうち時移りて八声の鶏の告渡る頃自餘の浪士
 と喚起しし沢卿退去の赴を傳へ此上は俺們も御跡
 に付き退散さる倘敵兵小出會つて命を乞うに血
 戦して落させぬ沢卿の後ろ城易く做しぬべしと
 懇ろに諭しつゝ更小まご一個の浪士と妙見堂小
 遣はし彼太郎兵衛が内通小依り沢卿退去せし
 こと趣き箇様々と言ひ送りし其人いまも飯を
 来さる小忽然として遠近小早鐘太鼓の鳴り響く

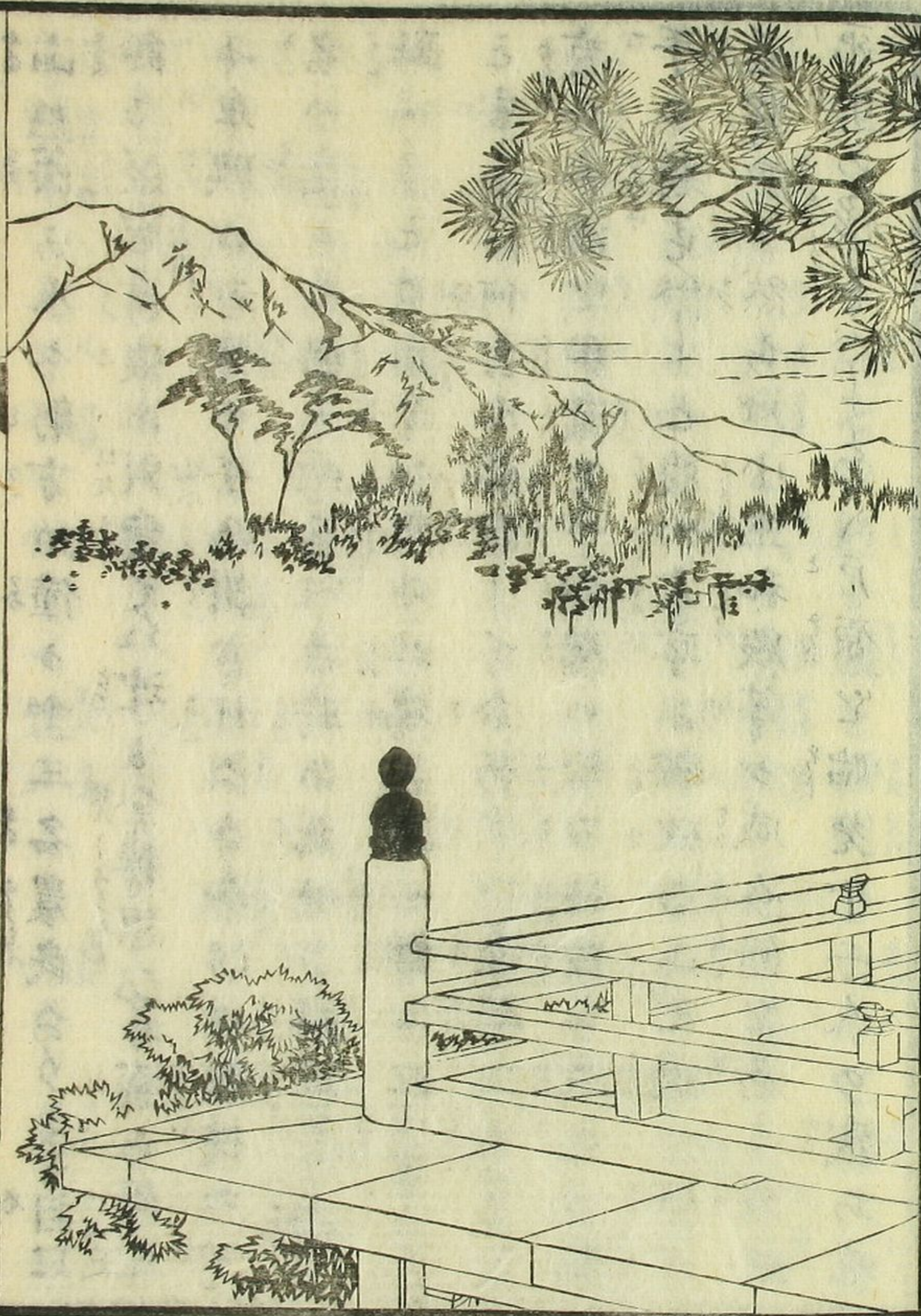
いぞ借い听し不違ひるく近郷の農夫等が人救を
聚むる相圖と覺し怒ひ渠等と抗戦して五人十人
討取りたりと云ふ事あり手柄と言ふは在らむは農
兵襲ひしる先小退去するも上策ありめと陣門の尚
固く鎖しを寝鎮りする躰にりてる平野を始め潜
やくに裏道よりぞ退きける

○但州鎮静及び長門の両士入洛と請ふ事
亦程小妙見堂小の防禦の備へを做しつるも今にも
藩兵攻来らば一泡吹うせし追退けん拳と握りて
控し処へ十四日の未明小至り銀山よりして一個の

浪士が遽し氣小馳来りて彼太郎兵衛が密話の趣
き且澤卿が退去のよりと緯云云と報知せ此上ハ
各位小も俱に退散せしむべしと云ふ小何れも駭
き又言ふよりも中ハ八郎卯橋の兩人ハ更ハ
騒げる気色もき沢卿の退去ありし御深慮ありし
更なるんけき平野以下にも大かとの退散する事
所存ありんが我輩既小此山小楯籠りたる其時より
決死と覚悟せし更故一步も退く事をせし是等の
昔と平野等に返答ありて然るべしと言ひし浪士
ハ又さらし言出さばき辞し何れねハ其終ハ山を

下りて銀山近く来りて見よはちや農夫が救百人
陣屋を圍ふ一躰ある故驚きたがうも躬ひとらめて
施すべきは術あるに道別ちぐく落たりこそ余は
妙見堂にては農兵皆蜂起ありとの報知を所
けと更こそせは高の知さるる芋堀も只一搦に
追崩し懲さば再び寄せ来らんと躬方小属せし農
兵は是等のよし一紙言合め手分を做さんとする
折しも猛可み所ゆる鐘太鼓と俱み救千の農民が
浮塵子の如くあそひ来りし中みも狩人乃一隊の
咸鉄砲を携へく木の根岩角の嫌ひなく進み登りつ

撃掛きば躬方と思ひし農兵等は何時の程ふり喪
心做しけん後ろの山小攀登りて或は大石大木を
どと妙見堂小投かけたる思ひがけり此形勢小戸原
等大いに駭き怒り先や麓小砍て出命限りに難
廻り威勢遂に究まらば砍死するは他何ふはと各
得物を引提て駈出さんと為らりし城南の急小押
禁め総して必死の戦ひを做さる凡の敵小依る物
にて尙互き敵と引組で刺互へ杯為ららんはは武士
の本意で何るべけれはも相手は下賤の者のとある
兄弟が一人當千の武勇を顯しあらん小は死人の



妙見堂
に南等
節小死
す



山やまの築きずのんが躬こみ方の僅わずかう十三名じゅうさん農民のうじんありとも目めに
餘あまる敵てきを前後ぜんご引受ひきうけての迎むかへ全勝ぜんしょう思おもひも寄よらば遂つい
小卑賤せんとんの者もの共ともの手て小掛こかけり杯さかさんさんにの死し後の汚よご
名なの免まぬうき色いろ回かへ死しはせむき時とき小死せせされば死しは増ます
耻ちけりりとらん卒そと侶りよ俱とも小此場このばは心こころ静しずかに生害なまがせん
と言いふに何なにも感服かんぷくして介さ何なにも最期さいごの盃さかせん
有あり合あふ酒さけを酌しやく交かせば卵たまご橋はしの短たん刀とう抜放ぬかち我われ先まづ死し
手ての魁さかはべりと腹はら一文字いちもんじ小搔か破やぶる小南こなんの側かたへ
差寄さしよつて然しからば小生せう和殿わだん等らが咸みな今錯いまさくを為なす果はて
死手しでの後のちをへりりとく戸原とほらと始はじめ十二人じふににんの残のこらむ

今錯いまさくあつて后のちその躬こみも腹はらを搔割かき白刃しろやいばを襟えりに押お
当あつ曳ひと一声いっせい我われと我われが首くび刎き死ししたるるの比類ひるい
罕まある最期さいごをかかしし偕ともままの生野なみのの銀山ぎんざん小馳こち向むかひひ
農民のうじん等らの陣屋ぢんや前まへまで押寄おしよせしるるに固かく門戸かどを鎖かぎ
し法はふ裡うちの更さら小物音ものねもあある最早もとも夜明よあけの程ほどもあある
ぬぬふままる寝鎮ねぢんりて在あるる他ほか小方略はうりやくの何なにりて
うと道みちかに慄おそむ所ところやありけん姑あやく猶豫うやうや為なたり
しが斯かての果はとと丈夫ぢゆうぶが門かどの扉かどを打破た破やぶり找たし
入りつつ索さくをぶぶも人影ひとかげささもああるるししもも偕ともの浪士なみし
等ら逃失にげししぞ手分てぶんを做なして追止おと先まづ先まへ村むら繼つ

小是等のよしと言ひ送り出口を固めし平野
 以下乃面々も遂に野夫小取田まは必死とあり
 戦へども衆寡の勢ひ敵一匡く并処小命を頑をも
 何り擒とありし者さへありて各四方へ散乱せり
 仍て美玉三平の彼太郎兵衛と侶俱小奈何も
 て澤卿の御安危を見届けんと思ふ心や厚くけん
 木の谷村と言へる迄辛く脱れ来りし小爰に
 も一隊の農兵起りて鉄砲をもと捕稠しうが二個の
 終小弾丸小中まで共小即死ししを并が中り
 平野次郎の固より大志あるもの故這回ハ更の齟齬

せしを斯る破れ至れるも此終めし己む
 べれさるぬを少し恥を忍び得しと奚ぞ命を輕
 輕しくせん免ふも角は此場を脱し竊る京師に
 赴きつ彼地小潜し事と議り我が赤心を露はさん
 と下僕徳藏ある者に心得させし召俱し敵の透間
 を見ましつ傍の徑小紛入り難所を厭はむ地を
 などして網場村迄落延びしに時の不幸の免は回
 けん豊岡の兵隊小思ひがけさく圍まきて遂小遁
 る所多く主從擒とありしとを斯の如く小有志の
 輩或ハ憤死を遂しし何り捕縛せし徒も何りて

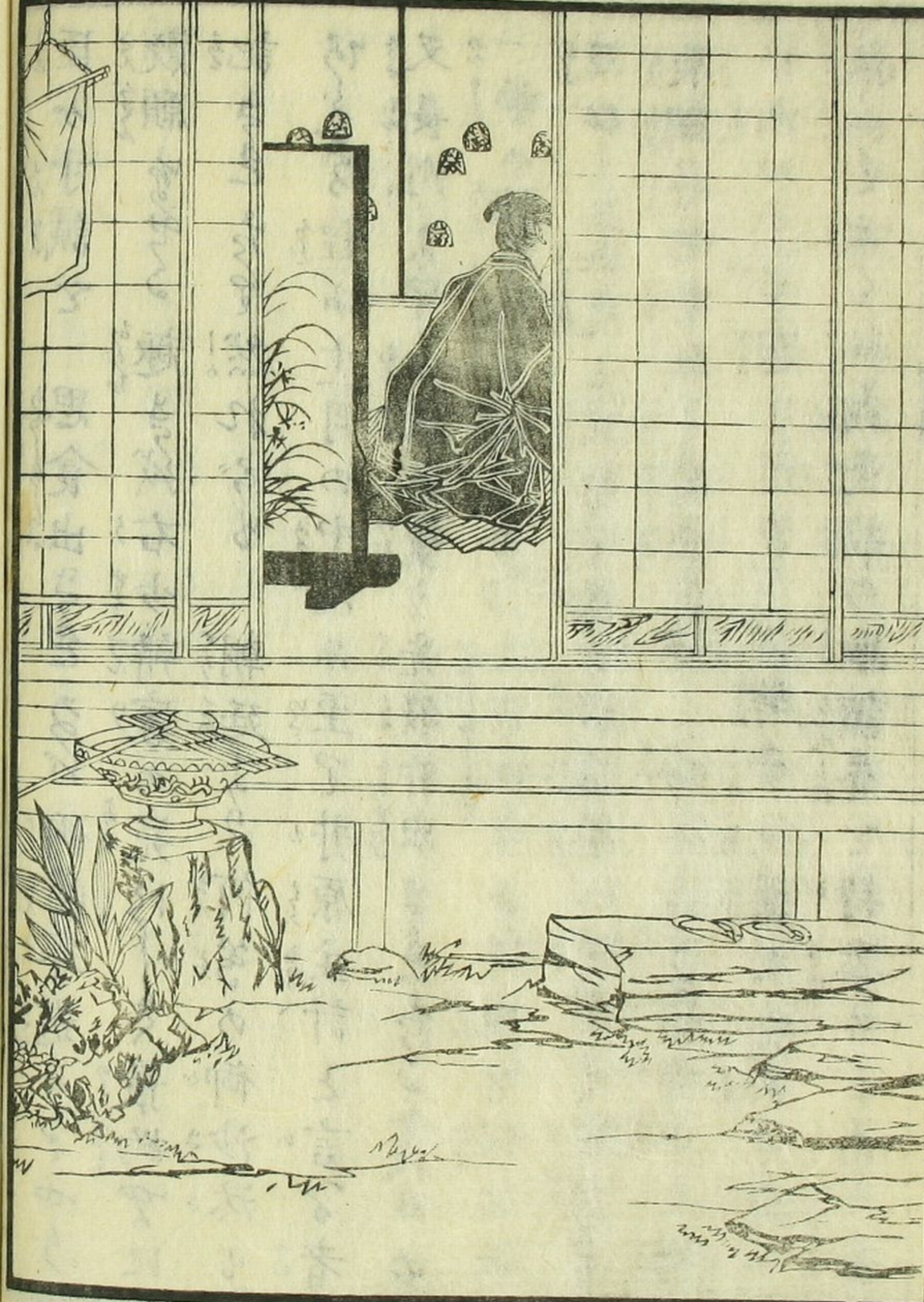
適る者ハ早まり一に沃卿ハ尚恙なく長州へたんと
 落ぬひぬ茲に至るも但馬の動搖稍鎮静たりと
 言ふ是より先小京師ハ既ハ八月十八日堺町御門
 警衛を免除せしむ一時ハ臨之毛利讃州以下の百々
 彼七卿を伴ひて帰國せしむる故あり 宸疑のよ
 りハ幕らせとあひて更ハ仰出さるるや 這回讃州以下乃
 輩不束の取計ハ何りあるに依り宰相父子へ取調べ
 と命下らるるも篤と事実を相糾し言上あすに至りて
 ハ是迄の父子乃精忠頭然たるべくハ条厚く勘辨せ
 しむべく仍て御不審霽るる乃間ハ姑く藩中の輩に

九門内の往来と許されハ留守居役の者一兩名
 滞京し其餘無用の士族ハ放てハ総て帰國せ
 しむべく昔右少辨勸修寺殿及び所司代淀侯より
 長州侯へ達せしむるハ其頃毛利家の長臣たる根来
 上総と言へる者數願の筋何りて浪花小到着せしに
 よる上京の義を伺ひ出しハ入京の義ハ姑く見合
 せ同藩留守居役の者急ぎ浪花小罷下り願意を所
 取り申出ふと仰出さるるなり一ハ則ち留守居某る
 者即日大坂へ赴き根来上総小對面あり 釋云云
 と報告るに上総ハ入京愜りせと何れハ又今更に詮

街まちをくく躬みづかて毛け利率りそ相殿さうだんの願ねが昏い一通いつう速すみ与よをゆゆを留とど
 守居しゅきの志し成なり受取うけとりて勸修寺殿くんしゆじだんへ差出さしだせし則すなち
 願昏ねがの趣おもきゆい今般夷狄こんぱんいぢ御親征ごしんせいの義ぎ未まど其機そのき
 會あひとまじりて行幸ぎやうきやう暫しばく御延引ごえんいん且かつつ堺町御門さかいまちごもんの警けい
 衛御免除ゑいごめいじゆ仰付おほせらるゝの条ぢょう謹つしんで拜兼まゐを然しかれ共ども小生せうせい更さら
 多年たふね尊攘そんざう心こころを尽つく敵感てきかんをさへ被うけりしに不計ふけい
 御警衛ごけいゑい差除さしぞうきとく敵慮てきりょ如何いかにの次第しだいあるや何なと
 と降心こうしん不仕ふし深く恐縮おそしゆく奉ほうまが上京じやうきやう乃すな上赤心じやうせきしんと申まし
 解とべくゆゆども目今めいこん曳船防禦えいせんぼうえい御ご精々しやうしやう盡力じゆんりき中成ちゆうじやう
 お故家来こけけらいの者ものに申まし含め先まづ差登さしだせゆへは是迄こゝ微い

臣おんが寸誠すんじやうと思食おぼ出ださるるが御憐察ごれんさつ遊あそびやう
 歎願たんげんをせり趣おもき成なり右少辨家うしやうべんけの宛あてに最約さいやく中ちゆうに
 記きさきたるを然しかれども朝廷てうていより何等いかんの御沙汰ごさたも
 何なにらざる程ほどふ十一月じゆんいちがつの中浣ちゆうわんぬ至いたり井原主計いげんしゆけいと言いはる者もの
 又長州またちやうしゆより大坂おほさかぬ登のぼり先般せんぱん仰出おほせさるる十八日じゆはちじふにちの
 一挙いつきよの調昏てうい持も持も致いたしゆへ上京じやうきやう仕つかりしに段だんを伺うかひぬ
 及およびしに此度こゝぬ又留守居またるしゆきの者もの浪なみ蒼そうへ下くだりし主計しゆけいより
 取調昏とけうてういを受取うけとり指さし出だせしと命めいとらるるに井原主計いげんしゆけい
 へ大おほいぬ苦慮くりょしるるに願昏ねが一通いつうと勸修寺殿くんしゆじだんへ
 捧たまはせ云いはく私義しぎ先般せんぱんの取調昏とけうてういを持も持も致いたしゆへ入京にゅうきやう

長なが使し坂さか伏ふし
 のの間ま小こ滞どまり
 在あして屢しばしば
 願ねが昏ぐらと捧たも
 く



御許容在せしきに留守居役の者とりて書面差上
 申べし旨仰付らむ段畏りていふ共這回宰相父子
 よりして縷々申し含め乃次第とれあり私上京仕り得
 と言上せざるに於てい父子の微衷も達さまじく殊
 更過日根未上総も入京と御許容これるく又私も同
 様小仰付らむゆてい父子あも如何程当惑為さるく
 且闔藩の人心も窮迫小及むん吏深く懸念仕れ此
 俟歸國も相成がく進退差逼さる乃次第何卒區々の
 鄙心の程御憐察在せられ入京の上父子の微衷と具
 小言上致さる義御許容仰付らむ御執成と願ふ杯

苦情を尽して記載せしむ恁もしく主計の稍伏見
 迄登りしにぞ勸修寺殿あも件の各面と禁中御披
 露あり朝議小及りせぬも尚入京と許しぬるに十二月
 三日小至り御沙汰御聞取各を勸修寺殿より渡さる
 て云く井原主計持叅の書取り留守居へ渡し回りと
 何故近日執奏家雑掌を伏見表へ遣さるは各面
 件の雑掌へ相渡さるべしと仰りし主計の尚も押
 返して又一通を認めし其歎願各の趣きに云く此程
 私上京の羨歎願小及ふと雖も御許容在らせしに
 て伏水小於て御雑掌衆へ各面相渡さるべし旨恐入

奉^{まも}りぬ固^{かた}より 九重^{ここのへ}深遠^{しんえん}の御評議^{ごひやうぎ}伺^{うかが}ひ奉^{まも}らんぬも
 こまかくゆふも定め^{さだめ}く深^{あか}き思^{おも}ひ召^{めい}の在^あるにせむれむの更^たる
 らんと再^{また}應願^{おうがん}ひ奉^{まも}る条^{じょう}憚^{たは}り多^{おほ}き更^たなる前^{まへ}昏^{くら}ふ歎^{なげ}願^{ねが}
 奉^{まも}る如^{ごと}く宰相^{さいしやう}父子^{ふし}の心底^{こころ}の私^ひ上^{かみ}京^{きやう}致^{いた}せしと篤^{あつ}と
 言^{こと}上^あるすに在^あらば相達^{あひたつ}し申^{まう}し難^{がた}しこれゆ仍^{なほ}て供^{くわ}人^{にん}
 教^{けう}等^{とう}精^{せい}々^{ささ}省略^{せうりやう}仕^{つか}り入^い京^{きやう}致^{いた}しけり御詮^{ごせん}美^み願^{ねが}ひ奉^{まも}る
 わく既^{すで}小^{せう}宰相^{さいしやう}父子^{ふし}の於^あてに 敵^{てき}慮^{りよ}を貫^{くわん}徹^{てつ}致^{いた}させたり
 と年来^{とんね}一途^{いちと}存^{ぞん}し詰^{つめ}別^{べつ}て攘夷^{じやうい}以來^{いらい}日^ひ夜^や寢^ね食^{じき}を忘^{わす}れ
 る迄^{まで}迄^{まで}勸^{かむ}精^{せい}罷^ひある段^{だん}の兼^{かみ}て御寵^{ごちゆう}察^{さつ}在^あるにせむれぬ尚^{なほ}
 御愛^{ごあい}憐^{れん}を垂^たりさせしと入^い京^{きやう}の義^ぎと御許^{ごきよ}容^{よう}を許^{ゆる}す具^ぐに

父子^{ふし}の微衷^{ひしゆう}の程^{ほど}聞^きし召^{めい}分^{ぶん}させしと宰相^{さいしやう}父子^{ふし}を
 始^{はじめ}めとて一^{ひと}藩^{はん}感^{かん}奮^{ふん}仕^{つか}りしめく勉^{べん}勵^{れい}致^{いた}せし然^{しか}る
 と使^し命^{めい}も累^{かさ}さきしと此^{こゝ}終^{しゆう}引^ひ取^とり更^{さら}憂^{うれ}慮^{りよ}の堪^たむれぬ
 の再^{また}三^{さん}歎^{なげ}願^{ねが}奉^{まも}らんぬ恐懼^{きゆうぐ}至^{いた}極^{ごく}ゆへに鄙^ひ情^{じやう}御^ご汲^く取^と
 下^{くだ}さる然^{しか}るべしや御^ご執^{しつ}成^{じやう}偏^{へん}に願^{ねが}ふの趣^{おも}ひは縷^{いと}々^々
 記^き載^{さい}して勸^{かむ}修^{しゆう}寺^じ殿^{でん}へ再^{また}捧^たげしと這^こ回^{かい}も御^ご許^{きよ}
 容^{よう}在^あるにせむれ遂^{つひ}に其^{その}月^{つき}十一^{じゅういち}日^{にち}執^{しつ}奏^{そう}家^けの雜^{ざつ}掌^{しやう}たる三^{さん}宅^{たく}
 右^{みぎ}衛^{ゑい}門^{もん}權^{けん}尉^{ゑい}立^た入^い左^さ京^{きやう}權^{けん}亮^{りやう}の諸^{しよ}司^し代^{だい}の公^{こう}用^{よう}人^{にん}田^{でん}崎^{さき}
 某^{その}附^つ漆^{しつ}ひて伏^ふ水^{みづ}駅^{えき}の泰^{たい}向^{かう}する豫^よて同^{どう}所^{しよ}の設^{せつ}け置^お
 うとて長^{ちやう}州^{しゆう}郎^{らう}に入^い来^きあり茲^{こゝ}に至^{いた}りて井^い原^{はら}主^{しゆ}計^{けい}が

取調各とりあむの其外そのわ小二種ちしゆの各面まへと遮与さへの誤あやり次つぎの卷ま
 と見て知まるべし

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 再、外、余、一、新、編、書、出、る、べ、し、と、見、て、知、る、べ、し、）

近世紀聞四編卷之二終

早稲田大学図書館

011688996041